

[研究ノート]

日露戦争中、米国で読まれた「日本」

米国公共図書館で請求された日本及び
日本文化関連書物に関する考察（上）

塩崎 智*

Books on Japan and Japanese Culture Read in the U.S. During the Russo-Japanese War (1)

Satoshi SHIOZAKI

The *New York Daily Tribune* carried a column entitled “Books people are reading” every Monday during the Russo-Japanese War from 1904 to 1905. The column presented a list of books requested at seven libraries in the U.S. I examined the data to find what books on Japan and Japanese culture were read at that time. There seems to be a tendency for Japanese to assume that English books written by prominent Japanese writers, such as Okakura Tenshin, Nitobe Inazo, and Asakawa Kanichi, were best-selling and were the primary sources of information about Japan and Japanese culture at that time. As a result, apart from Lafcadio Hearn’s Japan, their contributions seem to have been rather overestimated. The data reveals that it was books written by rather unknown American writers who had stayed in Japan for a long time as teachers that were

* しおざき・さとし：敬愛大学国際学部非常勤講師 比較文化・日米文化交流史

Part-time Lecturer, Faculty of International Studies, Keiai University; history of cultural intercourse between Japan and the U.S.

read commonly in the U.S. My opinion is that these American authors and their writings should be given more prominence in future research.

はじめに

米国新聞上で日露戦争関連記事を渉猟していた際、日刊紙『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』(*New York Daily Tribune*)の月曜日版に、「人々が読んでいる本」(Books People Are Reading)というコラムを発見した⁽¹⁾。

これは米国内7公共図書館、つまり、ニューヨーク公共図書館、首都ワシントンの議会図書館、シカゴ公共図書館、ボストン公共図書館、フィラデルフィアのフリー・ライブラリー (Free Library of Philadelphia)、ニューヨーク州北部のバッファロー公共図書館、サンフランシスコのメカニックス・インスティテュート (Mechanics' Institute Library) における人気図書の週間の傾向をまとめ、報告したものだ⁽²⁾。

このコラムの掲載期間は未確認であるが、日露戦争中は幸い、ほぼ毎週掲載されていた⁽³⁾。戦争中、果たしてどのような日本関連書物が実際に米国市民に読まれていたかを示唆する重要な資料になると思い、ここで若干の考察を試みる次第である。

コラムには、図書館毎に、分野別の人気図書名が挙げられている。この分類は図書館によってかなり異なる。分類項目が最も多いのが、フィラデルフィアで、①フィクション (Fiction)、②哲学と宗教 (Philosophy and Religion)、③社会学 (Sociology)、④自然科学 (Natural Sciences)、⑤実用技術 (Useful Arts)、⑥美術 (Fine Arts)、⑦文学 (Literature)、⑧歴史、紀行、伝記 (History, Travel and Biography) に分かれ、各分野2～5冊ぐらいが挙げられている。一方、最も分類数が少ないのがサンフランシスコとバッファローの場合で、サンフランシスコは、①フィクション、②紀行、③伝記、バッファローが、①フィクション、②児童向け、③その他、となっている。やはり各分類中の本の冊数は多くて5冊というところだ。ちなみに日本関連書物が選ばれる分野は、旅行、歴史かその他であり、旅行や歴史の

分野を設けていないニューヨークやバッファローでは不利という点を指摘しておく。

本稿では、日本関連書物とは、①日本人による著作、②日本人に関する著作、③日本の歴史、経済、文化などに関する著作、④日本の旅行記、日本側の日露戦争従軍記、の4つの分類に該当する図書とする。

これらの本は戦争中（1904年2月15日掲載～1905年9月11日掲載、計80週）延べ248冊（重複を含む）がリストアップされていたので、1週につき平均約3冊がコラムに掲載されていたということになる。一方、戦争前後（1903年12月7日掲載～1904年2月8日掲載と1905年9月18日掲載～1906年3月26日掲載）は1週平均1.3冊となるので、明らかに戦争中、日本への関心が高まっていたことが分かる。日露開戦報道が2月9日であり、これを含む週以降、「日本とロシアの歴史関連書」(Books on the History on Japan and Russia)や「ロシアと日本の紀行、旅行関連書」(Books on Travel in Russia and Japan)という記述が毎週のように登場することからも、戦争が図書館リクエストに与えた影響は明らかだ。

日本関連書物の登場冊数が最も多かったのは1904年5月31日～6月3日と1905年1月31日～2月3日の週で、それぞれ7冊である。1904年5月1日、陸軍第1軍は鴨緑河渡河を開始し、最初の陸戦が開始された。同第2軍は5月13日に上陸を終え、15日に行動を開始。南山の戦いに勝利し、5月30日に大連を占領した。日本陸軍の最初の攻勢段階であり、2月の開戦以来久しぶりに日本にとっては景気のいい報道が米国で活発に行われた時期と思われる⁽⁴⁾。また、1905年正月に旅順が開城し、奉天会戦が開始されるのが2月22日である。旅順陥落で勢いに乗った日本がさらに快進撃を続ける時期と言える。こうしてみると、日本関連書物人気度と戦況の間には少なくとも間接的な関係はあるのかもしれない。

本稿で明らかにしたい点は、日露戦争中、米国で実際にどのような日本関連書物がどれほど読まれていたかということである。

日米文化交流に多少の知識のある人ならば、日露戦争中、岡倉天心『日本の覚醒』⁽⁵⁾、朝河貫一『日露衝突』⁽⁶⁾、ラフカディオ・ハーン『神国日本

——ひとつの解釈』⁽⁷⁾が米国で出版され、新渡戸稲造『武士道』⁽⁸⁾がニューヨークの大手パットナム社から再版（初版は1900年）されたことは周知の事実であろう。約1年半の間に、後代に名を残すこれらの本が一挙に出版されたのは、やはり日露戦争と無関係ではあるまい。戦争中、不利とされていた日本がロシアに善戦すると日本への多面的な関心が高まり、それに応えるべく、米国の新聞、雑誌は様々な日本関連記事を次々に掲載した。そのような時代的背景のもとに、これらの英文著作はアメリカで出版、再版されたのである。

岡倉の長男一雄の回想によると、『日本の覚醒』の売れ行きは次のようなものだったという。「時あたかも日露戦役は、いよいよ絶頂に達しつつあった機宜をえた潮合いであったから、読書階級の人びとは争って講読した。で、この二百三十頁に足らぬ小冊子は、当時全米発刊書半ヵ年の統計中、第四位を占めたということである」⁽⁹⁾。

朝河の伝記的著作である『最後の「日本人」』には、『日露衝突』は、発売されるやただちに驚異的な売れ行きをみせ、版を重ねていった」とある⁽¹⁰⁾。新渡戸著『武士道』は米国大統領セオドア・ルーズベルトが日露戦争中に読んで感銘を受け、家族、親戚に推薦したというエピソードも広く伝えられている⁽¹¹⁾。

これらの記述を目にすれば、日露戦争中、米国の一般読書人はこのような日本人の英文著作を読み、日本及び日本文化に関する知識欲を満たした印象を受けるかもしれない。しかし、実際にこれらの本はそれほど当時米国で読まれていたのだろうか。その事実を裏付ける資料はあるのだろうか。また、他にどのような日本関連書物が読まれていたのか。これらの点をまづ前述の資料に基づき解明したい。

日露戦争中の全米公共図書館人気図書

戦争中、リストに5回以上掲載された日本関連書物を示すと次のようになる。日付はリストアップされた日付で、（ ）内のアルファベット2文

字は図書館名を示す (NY=New York, DC=Washington DC, PH=Philadelphia, CH=Chicago, BO=Boston, BU=Buffalo, SF=San Francisco)。

・ 1 位：ラフカディオ・ハーン『神国日本——ひとつの解釈』

1904.10.3 (DC), 10.31 (PH), 11.7 (BO), 11.14 (PH), 11.21 (PH), 11.28 (BU), 12.12 (SF), 12.26 (DC) (BO), 1905.1.2 (PH), 1.9 (SF), 2.6 (SF), 2.20 (NY) (PH), 3.6 (SF), 3.13 (PH), 3.27 (NY) (PH), 4.10 (DC), 4.17 (NY), 6.2 (SF), 9.11 (DC) (計22回)

・ 2 位：Clarence Ludlow Brownell, *Heart of Japan*, London, Methuen & Co., 1902.

1904.3.14 (PH), 4.4 (NY), 4.18 (NY), 4.25 (NY) (PH), 5.2 (BO), 5.9 (NY), 5.16 (NY), 6.6 (PH), 7.11 (NY), 7.25 (PH), 8.1 (PH), 8.8 (NY), 9.12 (NY), 10.17 (NY) (計15回)

・ 3 位：James Augustin Brown Scherer, *Japan Today*, Philadelphia, London, J.B. Lippincott Co., 1904.

1904.6.6 (PH) (DC), 7.4 (BU), 7.11 (PH), 7.18 (PH), 8.1 (NY), 9.5 (PH), 9.26 (DC), 12.19 (NY) (DC), 1905.2.6 (DC), 7.10 (PH) (計12回)

・ 4 位：Ernest Wilson Clement, *A Handbook of Modern Japan*, Chicago, A. C. McClure & Co., 1903.

1904.2.29 (NY), 3.7 (BU), 3.14 (PH) (BO), 3.21 (BO), 3.28 (BO), 4.4 (BO), 6.6 (BO), 8.8 (DC), 1905.1.23 (NY), 3.13 (DC) (計11回)

・ 4 位：Harrie Irving Hancock, *Jiu-Jits Combat Tricks*, New York and London, G. P. Putnam's Sons, 1904.

1904.10.10 (DC), 10.24 (BO), 10.31 (PH), 11.7 (BU), 11.14 (PH), 1905.1.2 (PH), 3.6 (BU), 3.13 (BO), 3.20 (CH), 3.27 (CH), 4.3 (CH) (計11回)

・ 4 位：Frederick Palmer, *With Kuroki in Manchuria*, New York, C. Scribners Sons, 1904.

1904.12.5 (DC), 12.12 (PH), 1905.1.9 (SF), 1.23 (DC), 2.6 (SF), 2.13 (NY), 3.6 (SF), 5.1 (NY), 5.8 (SF), 5.29 (NY), 7.3 (DC) (計11回)

- 7 位：朝河貫一『日露衝突』

1904.12.5 (DC), 1905.1.9 (DC), 1.23 (PH), 2.6 (BU), 2.20 (PH), 4.3 (PH), 5.8 (NY), 9.1 (DC) (計8回)

- 7 位：James Augustin Brown Scherer, *Young Japan; the story of the Japanese people, and especially of their educational development*, Philadelphia, London, J.B. Lippincott Co., 1905.

1905.6.12 (DC), 6.19 (BO), 6.26 (PH), 7.3 (BO) (PH), 7.24 (PH), 8.14 (BO), 9.4 (PH) (計8回)

- 7 位：George. H. Rittner, *Impressions of Japan*, London, J. Murray, 1904.

1904.8.29 (DC), 9.5 (NY), 9.19 (NY), 9.26 (BO), 10.3 (BO), 10.24 (BO), 1905.3.20 (DC), 5.8 (BU) (計8回)

- 7 位：Onoto Watanna, *Daughters of Nijo; a romance of Japan, with illustrations by Kiyokichi Sano*, New York, London, Macmillan & Co., 1904.

1904.4.25 (DC), 5.2 (BO), 5.30 (PH) (BU), 7.4 (DC), 7.18 (BO), 7.25 (DC), 9.5 (BU) (計8回)

- 11位：Mrs. Hugh Fraser, *A Maid of Japan*, New York, H. Holt & Co., 1905.

1905.7.17 (BO), 7.24 (DC), 8.7 (BU), 8.21 (BO), 8.28 (BO), 9.4 (BU), 9.11 (BO) (計7回)

- 12位：George William Knox, *Japanese Life in Town and Country*, New York, London, G. P. Putnam's Sons, 1904.

1904.12.26 (NY), 1905.1.23 (DC), 4.3 (PH), 7.3 (NY), 7.24 (DC), 8.21 (NY) (計6回)

- 12位：Harrie Irving Hancock, *Japanese Physical Training; the system of exercise, diet, and general mode of living that has made the Mikado's people the healthiest, strongest, and happiest men and women in the world*, New York, London, G. P. Putnam's Sons, 1903.

1904.6.20 (NY), 9.5 (CH), 11.7 (PH), 12.26 (PH), 1905.1.30 (CH), 9.4 (NY) (計6回)

・14位：岡倉天心『日本の覚醒』

1904.12.12 (DC), 12.19 (PH), 1905.1.16 (PH), 3.20 (PH), 5.1 (NY) (計5回)

・14位：Esther Singleton (ed. and tr.), *Japan as Seen and Described by Famous Writers*, New York, Dodd, Mead & Co., 1904.

1904.8.1 (BU), 8.15 (DC), 9.12 (PH) (SF), 1905.2.27 (DC) (計5回)

・14位：Sidney L. Gulick, *Evolution of the Japanese, social and psychic*, New York, F. H. Revell Co., 1903.

1904.2.22 (DC), 3.28 (PH), 4.18 (PH), 6.6 (CH), 9.26 (PH) (計5回)

・14位：Lois Livingston Seaman, *From Tokio through Manchuria with the Japanese*, New York, D. Appleton & Co., 1904.

1904.12.26 (PH), 1905.2.6 (PH), 2.13 (DC), 3.27 (PH), 8.7 (DC) (計5回)

以上の集計を基にして次のような考察が可能かと思われる。

まず、日露戦争中、米国で圧倒的によく読まれた日本関連書物は、ハーン著『神国日本』だった。地域的にも偏りがなく、1904年10月出版にもかかわらず、1905年春になってもその人気はそれほど衰えていない。

この圧倒的な『神国日本』人気の原因は幾つか考えられる。皮肉なことに、出版とほぼ同じ時期にハーンが日本で死亡し、米国でも新聞や文芸誌などで報じられ、本書に「遺作」という話題性が付加された。クリスマスショッピングが始まる頃に出版という時期も良かった。10月に出版された本書が12月に第4版が出るという記事が新聞に掲載されていたので、売れ行きも好調だったと思われる⁽¹²⁾。『ニューヨーク・タイムズ』紙や『インディペンデント』誌のクリスマス用書籍に選ばれるなど、マスコミで華々しく取り上げられていた。

ハーンの他の著作に関しては、1904年10、11月にボストンのフィクショ

ン分野で3回、1905年1月に1回、Hearn's Romances が挙げられている。これは具体的な書物名が挙げられていないので定かではないが、過去に出版された一連のハーンの作品と考えていいだろう。ハーンの作品は、ボストンの文芸誌『アトランティック・マンスリー』によく掲載されていたので、特にボストンの読者にハーンの作品は馴染み深かったのだろうか。

10月に議会図書館で『こころ』⁽¹³⁾が1回、1905年1月に『知られぬ日本の面影』⁽¹⁴⁾がフィラデルフィアで登場している。これらは時期的にみて、10月のハーンの死去、あるいは『神国日本』出版の影響と推測されうる。

このように、日露戦争中、米国で最もよく読まれた日本関連書物はハーンの著作という事実が判明したが、ハーンの作品が全てよく読まれたわけではないようだ。1904年6月頃に出版された『怪談』⁽¹⁵⁾は、すぐにバッファローとニューヨークでリストアップされたが、その後は一度も登場しない。論文的内容の『神国日本』よりはるかに一般受けしそうな『怪談』が、これほど人気がなかったのはなぜか。というより、なぜ『神国日本』ばかりが読まれたのか。それは、当時の米国人読者が知りたがっていたのは、「強国日本」を支える精神的要因だったからではないだろうか。日本人の宗教心、勇猛果敢な戦場での振る舞い、あるいは時にロシアよりキリスト教的とも言われるその「優等生的姿勢」。これらの理解の糸口を与えてくれる書物としては、確かに『怪談』よりも『神国日本』の方が相応しかっただろう。

ハーンを除くと、よく読まれていたのは、ブラウネル（2位：15回）、シャーラー（3位：12回と7位：8回）、クレメント（4位：12回）と、日本では比較的無名な著者の著作が多い⁽¹⁶⁾。ギュリックは日本に長期間滞在した牧師としてこれらの3人よりは知名度が高いと思われるが、ハーン、グリフィス、モース、チェンバレンら著名なジャパノロジストの比ではない。

ブラウネル、シャーラー、クレメントの3人はいずれも長期日本滞在経験者で、日本の教育機関で教師として働いていた。興味深いことに、ギュリック、シャーラー、クレメントの3人は日本でキリスト教布教に何らかの形で関わっていた。グリフィスもそうだったが、米国人が外国、外国人

に関する本を選ぶ場合には、やはり宣教師のようなキリスト教関係者が著した本が信頼感が持てるということなのだろうか。

これだけよく読まれた彼らの著作がどのような内容だったのか、吟味する必要がある。例えばシャーラーは、7位の著書 *Young Japan* の中で、日本人の性格の根本に関わる欠点として、deep-set dishonesty（根深い不誠実）と abandoned impurity（放蕩的猥褻）を挙げ、未だ成長途上にある国家日本の未来に疑問の余地を残している。日本を取り上げた書物と言っても、日本を好意的にばかり書いているわけではない。このような日本に対する批判的なコメントの系譜にも、米国人の日本理解の歴史的推移を知る上で触れなくてはならないだろう。

この3人の著作に比べると、岡倉天心、新渡戸稲造、朝河貫一ら、日本人による英文著作の人気は、今一つだったようだ。新渡戸著『武士道』はパットナム社から再版されたのが1905年6月と遅かったせいとか、ボストンで7月に2回、議会図書館で9月に1回しか登場しない⁽¹⁷⁾。岡倉著『日本の覚醒』は、調査した範囲ではアメリカの15紙・7誌の書評で好意的に取り上げられていたにもかかわらず、14位（5回）と揮わなかった。むしろ、『日本の覚醒』と同じ月に出版された朝河貫一『日露衝突』が4紙・5誌の書評でしか扱われていなかったのに、7位（8回）と健闘した。『日露衝突』は学問書的で読み易い本ではないが、日露開戦に至る経緯を公平な立場で著した書物という評判が人気を呼んだののだろうか。新聞・雑誌の書評本数が必ずしもその著作の読者数の指標とはならない例と言えるだろう。ちなみに米国で1904年春頃再版された岡倉著『東洋の理想』⁽¹⁸⁾は、1904年7、8月に2回、議会図書館でのみリストアップされており、弟の岡倉由三郎著『大和魂』⁽¹⁹⁾は、1905年5月と7月に議会図書館とフィラデルフィアで1回ずつリストアップされている。

日本関連のフィクション作品の人気も無視できない。当時の図書館の利用者は、大半が女性で、最新の大衆小説が断然人気があった。この図書館人気図書リストも、フィクション、伝記などと分類されていなければ、おそらくほとんどがフィクション作品で占められたことだろう。その意味で

も、このコラムは貴重な資料と言える。

筆頭はオノト・ワタナの小説である⁽²⁰⁾。*Daughters of Nijo* 以外にも、*The Heart of Hyacinth*⁽²¹⁾が4回（1904年2月～4月）、*The Love of Azalea*⁽²²⁾が2回（1904年12月～1905年3月）、*The Wooing of Wistaria*⁽²³⁾が2回（1905年6月～7月）と合計で16回登場している。

フィクションは女性読者が多かったためか、ヒロインとして登場する日本人女性が興味を引いたのだろう。フレイザー夫人の *A Maid of Japan* が11位（7回）と読まれたのも同じ理由によるのではないだろうか。フィクション分野では、他に、*Miss Cherry Blossom of Tokyo*⁽²⁴⁾と *My Japanese Wife*⁽²⁵⁾、*A Japanese Romance*⁽²⁶⁾が各々1回ずつ登場しており、これらも題から察するに日本人女性を主人公に描いたものだろう。しかし、日本人女性を主人公とした徳富蘆花『不如帰』の英訳 *Namiko*⁽²⁷⁾は、書評で日本近代小説の最初の英訳と紹介されたものの、議会図書館で1回リストアップされたに過ぎなかった⁽²⁸⁾。

ワタナの作品は文芸誌にも連載されていたので、当時、知名度はなかなか高かったと思われる。大衆小説家としての手腕はかなりのものだったのだろう。当時これほど読まれていたとなると、その内容を吟味し、米国人読者の日本人理解にどのような影響を与えたか考察してみる必要がある。

ルーズベルト大統領がホワイト・ハウスで日本人指導者に稽古をつけてもらっていたという話もあるように、日露戦争中、柔道が *Jiu-jitsu* という名前で米国に広まったことは知られている⁽²⁹⁾。ハンコック著 *Jiu-jitsu* が4位（11回）、同じく *Japanese Physical Training* が12位（6回）と広く読まれたことは、この柔道人気を十分証明している。ハンコックは後者の女性編、子供編も出版し、それも1回ずつリストアップされている。柔道関連としては、*Skinner* の *Jiu-jitsu*⁽³⁰⁾も1905年5月から7月に3回挙げられている。

小さい身体日本人が大きなロシア人を投げ飛ばす技が、小国日本軍の大国ロシア軍に対する善戦と重なり、興味を呼んだのだろう。護身術としての利用価値も宣伝されていた。

しかし終戦後には、柔道関連書物はこのコラムに全く挙げられないとこ

ろを見ると、柔道は戦争の影響が最も大きかった日本文化の一分野ではあったが、一方で戦争中の一時的なブームに過ぎなかったとも言える。

最後に、登場回数が5回未満だったため、上記の人気図書上位リストに取り上げられなかったものの、興味深い本が幾つかあるので紹介しておく。

- *Katz Awa, “The Bismarck of Japan” or The Story of a Noble Life*⁽³¹⁾

勝海舟の伝記で、1905年6、7月にボストンで3回登場している。出版社も無名であり、さほど新聞、雑誌の書評、広告で取り上げられたとも思われない。おそらく、ボストンの地元紙の書評で好意的に紹介されたのではないだろうか。著者のクラークはグリフィスのラトガーズ大学時代の友人で、化学教師として明治4年から8年まで静岡と東京で教壇に立った。

- *The Japanese Fairy Book* (1905.2.6, BU)⁽³²⁾

- *Kibun Daizin* (1904.10.31, BU)⁽³³⁾

この2冊は、いずれもバッファローで1回ずつ、児童向け図書分野でリストアップされた。どちらもいかにも日本風の挿絵が豊富で、絵本的な魅力が人気を呼んだのだろう。新聞、雑誌の書評でも好意的に取り上げられている。後者は、紀伊国屋文左衛門の生涯を基にした話で、児童向け雑誌『セント・ニコラス』に連載されていたようだ。この類の書籍は、しかし、図書館より書店での人気の方が高かっただろう。

- *European and Japanese Gardens* (1904.10.31 and 1905.6.12, DC)⁽³⁴⁾

- *Japanese Plays and Playfellows* (1905.3.13, PH)⁽³⁵⁾

- *Impressions of Ukiyo-ye: The School of the Japanese Colour-print Artists* (1905.8.7, BO)⁽³⁶⁾

これら3冊は、それぞれ庭園、演劇、浮世絵と、日本文化の専門分野について書かれた書物で、日露戦争が日米文化交流に与えた影響の大きさを示している。日露戦争の取材に、欧米から多くの新聞、雑誌記者が戦地へ赴くべく日本を訪れたところ、日本政府は軍事機密の問題などもありなかなか現地出発の許可を出さない。そこで、従軍記者たちは当初の目的はさておき、日本の社会、文化、習俗に関する記事を書き送ったこともあり、アメリカ人の日本文化への関心が高まった。

結 論

以上見てきたように、日露戦争中、アメリカでよく読まれていた日本関連書物は、ハーンとフレイザー夫人などの著作を除いては、その大半が一般にはよく知られていない著者によるものだった。日本で研究を進めると、現地の資料に直接当たることが少ないために、実態がよく分からない。勢い、世界を舞台に「活躍」した「国際的日本人」の貢献を過大評価しがちである。

しかし現地では、意外な本が読まれており、そのような著作の内容の検証とアメリカ人読者に与える影響の研究は、これから包括的に進められねばならない。

最後に本資料を基に、今後明らかにしていかなければならない点をまとめて拙論を結びたい。

1. 日露戦争中、日本関連書物のニーズは戦前、戦後と比べて高まっていたことは明らかなが、同じことはロシアについてどの程度言えるだろうか。ロシア関連書物ではどのような本が人気があったのか。さらに、もっと枠を広げて、例えば、満州や朝鮮に関する書物などの人気はどうだったのだろうか。戦争中、アメリカ人の関心は日本にばかりあった訳ではないだろう。
2. 日本関連書物への関心の地域差はあるのか。例えば、ボストンの親日的雰囲気が立証されるか。
3. 文芸誌『ブックマン』に毎月掲載された、全米各都市書店売上トップ6と、図書館の人気とを突き合わせた場合、どのような結果が得られるか。これらの点に関しては稿を改めて（下）において考察を加えたいと思う。

(注)

- (1) 1841年、ホーレス・グリーリによって創刊。大衆受けするセンセーショナルリズムを避け、社会改良主義的論陣を張った。マルクスが執筆していた新聞としても知られる。磯部佑一郎『アメリカ新聞史』（ジャパントイムズ、1984年）によると、「学芸問題にも力を入れ、新刊

書の批評欄を設けたりして、literary journalism の型を発揮しようと大いに努めた」という。1924年に『ヘラルド』と合併して『ヘラルド・トリビューン』となる。

(2) 実際には、英語で次のように記してある。

- The most popular books for the week, according to the demands at the library. (New York)
- The following list of books called for indicates the taste of readers in Washington. (DC)
- Among the books most frequently in demand at the Boston Public Library during the week. (Boston)

これらの表現中の demand と call for の意味が問題となる。つまり、図書館に対する利用者からの書籍購入希望なのか、それとも所蔵図書の出貸請求なのか。

川崎良孝『図書館の歴史 アメリカ編 増訂第2版』(日本図書館協会、2003年)によると、アメリカの公共図書館は本の紛失を恐れ、19世紀を通して閉架制だった。クリーブランド公共図書館が他に先駆けて1890年に開架制を採用した。1894年の同図書館の理事会で、「われわれが導入した大革新(開架制)は他館でも採用され始め、いずれ常識になるだろう」と豪語していたほどだから、1904年頃、リストに登場する公共図書館が閉架制であった可能性は低くない。しかも、このクリーブランド公共図書館の場合も、開架とはいえ「書架にはガラス戸があり、利用者の求めに応じて助手が本を取り出ししていた」とあるので、その際に利用者により請求票が書き込まれたのではないだろうか。つまり、図書館に利用者から出された貸出請求票の1週間分の集計と理解してよいと思われる。

その意味では実際に読まれた本の人気リストとは正確には言えないが、コラムのタイトルに「人々が読んでいる本」とあることから、当時よく読まれていた本のリストとほぼ一致すると考えて問題はないだろう。ちなみに、サンフランシスコの Mechanic's Institute は機械工などを中心とする会員制の図書館で、サンフランシスコ公立図書館は別個に存在していた。

- (3) 日露戦争中とは、開戦となった1904年2月8日からポーツマス条約調印1905年9月5日までとする。この間、ほぼ全ての80週にわたりこのコラムは掲載されていた。なお、ニューヨーク、議会、フィラデルフィア、シカゴ、ボストンの5図書館に関しては、ほとんど毎週情報が掲載されていたが、バッファローは36週、サンフランシスコは17週のみの掲載だった。
- (4) この頃、週刊誌『インディペンデント』(1904年6月9日)は、日本関連書(Books about Japan)という特集記事を載せている。日本への関心が特に盛り上がった時期だったのだろうか。推薦されている書籍は次の通り。

W. Petrie Watson, *Japan, Aspects and Destinies*, New York, E.P. Dutton, 1904.

G. Waldo Browne, *Japan, Place and the People*, Boston, Dana Estates & Co., 1904.

Edited by Esther Singleton, *Japan, Described by Great Writers*, New York, Dodd, Mead & Co., 1904. (※)

James A. B. Scherer, *Japan Today*, Philadelphia, London, J.B. Lippincott Co., 1904. (※)

George. H. Rittner, *Impressions of Japan*, London, J. Murray, 1904. (※)

このうち、(※)を付した3冊が後出の図書館貸出請求人気上位リストに挙がっている。

- (5) Kakuzo Okakura, *The Awakening of Japan*, New York, Century Co., 1904.
- (6) Kanichi Asakawa, *The Russo-Japanese Conflict, Its Causes and Issues*, Boston, Houghton, Mifflin & Co., 1904.
- (7) Lafcadio Hearn, *Japan, an Attempt at Interpretation*, New York, London, Macmillan & Co., 1904.
- (8) Inazo Nitobe, *Bushido: The Soul of Japan*, Philadelphia, Leeds & Biddle, 1900., New York, London, G.P. Putnam's Sons, 1905.
- (9) 岡倉一雄『父岡倉天心』、中央公論社、1971年、200ページ。
- (10) 阿部善雄『最後の「日本人」——朝河貫一の生涯』、岩波書店、1983年、46ページ。
- (11) 例えば、明石康・NHK「英語でしゃべらナイト」取材班『サムライと英語』、角川書店、

- 2004年。
- (12) 1904年12月11日付けの『サンフランシスコ・クロニクル』紙。
- (13) Lafcadio Hearn, *Kokoro: Hints and Echoes of Japanese Inner Life*, Boston, Houghton, Mifflin & Co., 1895., New York, Harper & Brothers, 1898.
- (14) Lafcadio Hearn, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, Boston, Houghton, Mifflin & Co., 1894.
- (15) Lafcadio Hearn, *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*, Boston, Houghton, Mifflin & Co., 1904.
- (16) 小林功芳「東京学院の師弟像——E・W・クレメントと坂田祐」(『英学史研究』26号、1993年)によると、「クレメントは、第一高等学校で16年にわたり英語を教授した経歴と、*A Short History of Japan* など日本に関する幾つかの著作によって、研究者の間で知られている」(137ページ)という。ブラウネルに関しては、高成玲子「富山の英学——ロンドンのブラウネル」(『東日本英学史研究』3号、2004年)にブラウネルと日本との関わりが簡潔にまとめられている。ブラウネルはアメリカ人のジャーナリスト、著述家で、「世界歴訪の途中で日本に立ち寄り、東京専門学校、東京学館、富山県尋常中学校、福井県尋常中学校などで英語教師をしながら、5年間滞在。明治33年から約3年間ロンドンで日本関係の記事を書いたり、大英博物館で仕事をしたりした。その後アメリカに帰国して……」(53ページ)。なお高成氏によると、*Heart of Japan* は、チェンバレン著『日本事物誌』で日本に関する著作12冊の一つに選ばれているという。シャーラーは、ニューベリー・カレッジの学長で、かつて佐賀県で5年間教育に携わっていた。
- (17) 新渡戸著『武士道』は、終戦から1906年3月までに、9回登場するので、終戦直後、最もよく読まれた日本関連書物と言える。しかし、そのうち7回がフィラデルフィア図書館で挙げられているので、限られた地域的人気の域を出なかったとも考えられる。
- (18) Kakuzo Okakura, *The Ideal of The East: With Special Reference to the Art of Japan*, London, J. Murray, 1903.
- (19) Yoshisaburo Okakura, *The Japanese Spirit, with an Introduction by George Meredith*, New York, J. Pott, 1905.
- (20) 1879年生まれの子手女流作家。本名は Winnifred Eaton Babcock。長崎生まれのカナダ育ち。当時、ボストンに滞在していた社会主義者金子喜一は、「米国における戦争文学と同胞の英文著書」(『新公論』1号、1905年1月)で、ワタナについて述べている。「彼女の小説は翻訳するのではなく、唯だ材を日本にとりて所謂日本の小説を作るので、……ヲノトワタンナは既に成功して一家を成している」。ちなみに、ブッチーニ作オペラ『蝶々夫人』がイタリアのミラノで初演されたのは1904年のことである。
- 児玉実英『アメリカのジャポニズム』(中公新書、1995年)によると、1890年代から1910年代にかけて、日本を題材にした数多くの小説がアメリカで書かれ読まれていた。このようなジャポニズム文学に関してはまとまった研究がないとのことである。
- (21) Onoto Watanna, *The Heart of Hyacinth*, New York, London, Harper & Brothers, 1903.
- (22) Onoto Watanna, *The Love of Azalea*, New York, Dodd, Mead & Co., 1904.
- (23) Onoto Watanna, *The Wooing of Wistaria*, New York, London, Harper & Brothers, 1902.
- ワタナ人気で復刻されたのだろうか。1905年にはワタナの新作は出なかった。
- (24) John Luther Long, *Miss Cherry Blossom of Tōkyō*, Philadelphia, London, J.B. Lippincott Co., 1905。著者ロングは小説『蝶々夫人』の作者である。
- (25) Clive Holland, *My Japanese Wife*, New York, Macmillan & Co., 1895; London, R.A. Everett & Co., 1903.
- (26) Clive Holland, *A Japanese Romance*, London, Hodder & Stroughtn, 1904.
- (27) Kenjiro Tokutomi, Translated by Sakae Shioya and H. F. Edgrett, *Namiko*, Boston, Herbert B. Turner & Co., 1904.

- (28) 同じく、金子喜一の記事に、*Namiko* は、「今や四版を重ねて評判の余りなかりし割合に売れ行きは良かったのである」とある。この記述によれば、図書館リストに1回掲載されるほどの本は少なくとも「小ヒット」を飛ばしたことになる。ちなみに、この記事では岡倉著『日本の覚醒』は酷評を買い、新渡戸著『武士道』は好評である。またハーンは次のように激賞されている。「北米にありて日本に同情を寄せてある人にして、ハーン氏の著述を知らぬ者はない、否な米人が日本といふ新知人を得たのは實にグリフヒス氏とハーン氏を通じてである、従来多くの宣教師が無数の著述をなして日本を紹介したが彼等是一種の色眼鏡を通して見るのであるから、小泉八雲氏の如く眞の日本を紹介することは出来なかった」。
- (29) 北米斬天生「新日本村雜記（一）」（『新公論』5号、1905年5月）に次のような記事がある。「海外で名高き日本の名物は芸者と柔術、大統領ルーズベルト氏が物好きにもこれを知り、柔術の流行は益す甚だしく、随て需要供給の原則上間に合せの粗製品の流れ込みとするは嘆ずべし」。これは柔道の指導者について書いたものだが、柔道の指南書についても同じことが言えたかもしれない。
- (30) Capt. Harry H. Skinner, *Jiu-jitsu*, New York, Japan Publishing Co., 1904.
- (31) E. Warren Clark, *Katz Awa, "The Bismarck of Japan" or The Story of a Noble Life*, (New York, B.F.Buck, 1904.)『ネイション』（1905年6月29日）の書評で、ジャーラーの *Young Japan* とともに好意的に取り上げられている。
- (32) Yei Theodora Ozaki, *The Japanese Fairy Book*, Westminster, Archibald Constable & Co., 1903.
- (33) Gensai Murai; tr. by Masao Yoshida, *Kibun Daizin; or, From shark-boy to merchant prince*, New York, The Century Co., 1904.
- (34) Glenn Brown, *European and Japanese Gardens*, Philadelphia, H. T. Coates & Co., 1902.
- (35) Osman Edwards, *Japanese Plays and Playfellows: With the Twelve Colored Plates by Japanese Artists*, London, W. Heinemann, 1901; New York, Lane, 1901.
- (36) Dora Amsden, *Impressions of Ukiyo-ye, the School of the Japanese Colour-print Artists*, San Francisco, P. Elder & Co., 1905.

